Dialogue 7

EAA eBooklet-16

East Asian Academy for New Liberal Arts

Joint Research and Education Program
by the University of Tokyo and Peking University

CHEUNG Ching-yuen × ISHII Tsuyoshi

[張政遠×石井剛　2020 年 12 月 22 日]

Dialogue 7

EAA eBooklet-16

East Asian Academy for New Liberal Arts
Joint Research and Education Program
by the University of Tokyo and Peking University

CHEUNG Ching-yuen × ISHII Tsuyoshi

[張政遠×石井剛　2020 年 12 月 22 日]

Contents

序　中島隆博.....3

対談　張政遠✕石井剛.....4

対談の後に　未知の道を行く　石井剛.....42

対談者について.....45

EAA Dialogue

序

中島隆博（東アジア藝文書院学術顧問）

2019 年に発足した東アジア藝文書院は、東アジア教養学という来るべき学問のために、その成果を積極的に刊行していこうと考えています。ここにお届けするのは、EAA ダイアローグと銘打ったシリーズです。

ダイアローグとはプラトンに由来する概念で、dia-logos すなわち「ロゴスを通じて」という古い意味を有しています。そして、その「ロゴス」には、言葉や論理に加えて、万物の根源や批判的な切断という複数の意味が重層的に交差しています。東アジアの概念に翻訳をするならば、おそらく「道」や「文」ということになるでしょう。「道」は語ることであり根源でありますし、「文」もまた言葉であり切り分けられたパターンであるからです。重要なことは、ダイアローグは誰かとともに対話を行い、お互いにロゴスを吟味しあって、新しい地平を開こうとすることだと思います。

EAA ダイアローグは、東アジア藝文書院に集っていただいた方々との対話から生まれています。読者のみなさまには、そこに込められた学問への思いや望みを受け止めていただければ幸いです。何ができるかだけでなく、何を欲するのかが、来るべき学問にとってはどうしても必要なことだからです。

COVID-19 のパンデミックがあぶり出したのは、「既知」の諸問題でした。それらはすでにわかっていたにもかかわらず、様々な理由から「できない」とされてきたものです。来るべき学問は、そうした「既知」の枠組みを乗り越えるために、真に「未知」なるものに触れる責任があると思います。

EAA ダイアローグを通じて、ともに「未知」なるものを思考したいと思います。

EAA Dialogue

CHEUNG Ching-yuen×ISHII Tsuyoshi

[張政遠×石井剛　2020 年 12 月 22 日]

●プロローグ：UTCP で交わる道

石井：張政遠さんは、今年（2020 年）の 10 月 1 日に着任なさったばかりですね。
張：そうですね。中秋節の日でした。
石井：せっかく張さんが EAA に加わってくれたので、本当はこの間、もっと早い時期にいろいろとやりたかったんですけれども、コロナの体制の下で、何もできないまま今日に至ってしまいました。やっぱり私としては EAA に張さんをお迎えできたというのは大変うれしいことですから。
　張さんとはずいぶん長いおつきあいになります。初めて UTCP にいらしたのは東日本大震災よりも前のことではなかったでしょうか。
張：UTCP に初めて来たのは、2008 年の夏でした。当時、小林康夫先生、中島隆博先生、あとデンニッツァ・ガブラコヴァさんもいましたね。それが初めての顔合わせというか、たぶんこの建物の上の階の部屋だったと思います。
石井：UTCP のブログを見てみると、2008 年の 7 月 25 日に「【来訪】 7 月 24 日----香港から----」という記事が上がっています（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2008/07/hong-kong-philosophers-visit-u/）。小林康夫さんが自ら執筆していますね。これを見ると、2 階にある 2 部屋ある UTCP のオフィス・スペースのうちの狭い部屋のほうに集まっています。そこでケビン・ラム（林永強）さんと張さん、デンニッツァさん、中島さんと小林さんがいて、ほかに西山雄二さんもいたんですね。

張：ええ、そうです。ケビンさんと一緒に来ました。中島先生の西田論を読んだことがあり、東京大学にも日本哲学をやっている研究者がいるのを知って、一応連絡してみましたら、ぜひ駒場で会いましょうと言われました。それから、いろんな UTCP の関連のイベントで会いました。たぶん初めて石井さんに会ったのは 2010 年か 2011 年かもしれません。

石井：中島先生の西田論というのは英語で書かれていたものですか。

張：そうですね。あの西田論は、西田幾多郎と中国哲学との関係だったと思います。UTCP のウェブサイトにいまでも掲載されている「Genealogy of Nothingness: Nishida Kitaro and China」（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/publications/2007/03/the_chinese_turn_in_philosophy/）はずです。それで、ちょうど 2008 年の 12 月に香港に学会がありまして、ケビンさんが主催者だったのですが、この『21 世紀における中国と日本の哲学』というシンポジウムを開催しますので、小林先生にも中島先生にもぜひ香港にいらしていただきたいという打ち合わせでした。あの学会の論文集は、この本、『日本哲学の多様性』（野家啓一監修、林永強・張政遠編集、世界思想社、2012 年）です。

石井：そうなんですか。わたしは、実はこの本の書評を書いて『教養学部報』に掲載してもらっています（「〈本の棚〉哲学・日本哲学・日本語哲学」、『教養学部報』第 556 号、2013 年 5 月。https://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/about/booklet-gazette/bulletin/556/open/C-7-2.html）。『教養学部報』の書評は、駒場の教員が出した本を対象にしているのですが、ケビンさんはこの時のご縁がきっかけで、書評当時は教養学部にできたばかりの PEAK で働くようになっていました。読んでもらえば一目瞭然だと思いますが、わたしは PEAK とケビンさんへの応援をしたくてこの記事を書かせてもらったのです。

張：中島先生も後日 UTCP のブログに参加報告をアップしていますが（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2008/12/international-conference-of-en/）、そうしたなかで、UTCP という新しい哲学を一緒にやりましょうという動きが生まれてきて、私たちも、当時日本哲学はあんまり誰も多くの

人の関心を集めることがなかったころでしたので、いろんな研究会や学会で UTCP といっしょにやっていけそうだということに、まさに希望を感じました。

石井：2010 年にも UTCP では日本思想セミナーとして西田幾多郎を取り上げていますが、その時にも張さんはいらしています（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/events/2010/07/utcp_seminar_by_lam_wingkeung/）。

私は 2010 年から正式に UTCP のメンバーになったのですが、張さんと初めてご一緒したのはたぶん台湾に行った時だったでしょうか。

張：それは 2012 年 9 月に台湾大学で行われた「Japanese Philosophy in the East Asian Perspective」という学会でした。（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2012/09/intern/）。

石井：2013 年 6 月には、「3・11 後の復興と哲学」という講演をなさっていますね（https://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2013/06/post-621/）。

張：それはまさに被災地を巡礼した後、UTCP で発表したものでした。この本（『東亞視野下的日本哲學：傳統、現代與轉化』、国立台湾大学出版センター、2014 年）が当時の台湾の学会の論文集です。

石井：そうです。わたしはこの中で天下論を初めて書かせてもらいました。

いつのことかは覚えていないのですが、高田康成先生がわたしにとても印象的なことを話してくださいました。要するに、UTCP は国際的な哲学のセンターになるという大きな野心を抱いていたのですが、ただその中には日本哲学というのは、全然ないわけじゃないけれども、あまりなかった。しかも日本哲学をどうやって国際的に開いていくのか。それは必要なことであるにもかかわらず、それほど積極的には行われていなかった。そこに、張さんとケビンさんの 2 人がいらしたということで、高田先生は、もうとにかく頑張るしかないと決意なさったのだというお話でした。日本人ではない、しかも若い研究者が、海外でこれほど日本哲学に対して情熱を持ってこんなに一生懸命やってくれているのは、もう感動したというのです。だから、この台湾のシンポジウムに高田先生に来ていただきましたね。

張：はい。台湾にも一緒にいらっしゃいました。

石井：そうですよね。この時、高田先生は加藤周一に関してご発表なさっ

たと思います。ともかく高田先生からそのようなことを聞いていましたので、すごい人たちがいるんだなというようなイメージでいたんです。

●香港から仙台への道

石井：さて、ここからが今日の本題です。今日は最初、香港生まれで、香港中文大学の哲学系で学部教育まで受けてこられた張さんが、なぜそのあとに東北大学を目指して日本に来られたのかという疑問から始めて、張さんの学問的な成長の過程をまずはお伺いしたいと思っています。
張：はい。私は 1995 年に香港中文大学文学部哲学科に入りました。しかし、高校まではずっと理系でした。
石井：そうなんですか。
張：特に当時の香港はイギリスの植民地時代だったのですが、当時、イギリス式の「A Level」という入試形式がありまして、文系か理系かという二者択一的な道だったんです。私はずっと理系的な道を進んでいて、高校の最後の年には、やはり理系ですから、医学部とか、あるいは理学部とか、その大学を志望しようと思いまして、しかし、ちょうどその最後の高校、当時の香港では、セカンダリースクールというのが 7 年間ですね。つまり、高校というシステムがなくて、セカンダリースクールというものがありまして、プライマリースクール 6 年間、セカンダリースクール 7 年間で、大学 3 年間というイギリスシステムだったんです。そのセカンダリースクールの 7 年生の時に、自分とは何か、何をすべきか、今になって回顧すれば実存的危機みたいなものがありました。自分は何をしようとしているのかが全く分からなくなったのです。それでも理系という道には予測可能な人生の設計が見えていたので、第一希望は、一応申込書を医学部にしました。
石井：医学部ですか。
張：一応、香港大学の医学部と香港中文大学の医学部を第一、第二志願として、出願しちゃったんですよ。しかし、1 回だけ志願の修正が許されますので、その時に、自分は医学部でいいのか、あるいは、実は本当は何をやろうとしているのか、非常に迷ってしまって。香港では、哲学というデ

ィシプリンについて、まだよく知られていなかったと思いますが、私は哲学なら、まさにこういう問いに答えを出してくれるだろうという期待がありまして、結局第一志望として香港中文大学文学部哲学科に願書を修正して出してみたら、入ることができました。

当時の哲学科は、分析系というか、論理学の授業があって、それに非常に興味がありました。やはり理系出身ですので、哲学史とか、特に中国哲学とか、日本哲学を今やっている人間としては非常に恥ずかしいことですけれども、東洋哲学には全く興味がなかったんです。哲学科に入って、論理学とかデカルトとかそういう授業ばっかりを取っていて、西洋哲学一筋でやっていくよ、しかも、すごく自分のやろうとしていることがだんだんはっきり見えてきて、つまり、理系出身ですけれども、やはり科学哲学、論理学、つまり真理とは何かについて、やはり西洋哲学という分析哲学の伝統もありまして、これをやろうと思ったのです。

3 年生で卒論を書かないといけないんですけれども、張燦輝先生が指導をしてくれました〔張氏はこのあと 2022 年 12 月 22 日に、張燦輝と香港哲学についての講演を駒場で行っている。https://www.gsi.c.u-tokyo.ac.jp/event/4990/〕。張燦輝先生は、フライブルク大学で博士号を取って、ハイデガー研究している学者です。ハイデガーですから、私の現象学的な学問は、張燦輝先生から来ているわけです。だから、1 年生に入って論理学、2 年生に入って、張燦輝先生のデカルトや現象学の授業を取って、卒論はハイデガーについて書きました。ハイデガーの「形而上学とは何か」という論文があるんですけれども、その中に無という問題が取り上げられていまして、卒論をその無とかハイデガーについて、つまり、かなり張燦輝先生の影響を受けての卒論だったと思います。

東洋的な思想とか研究とかは、当時はあんまり意識的にはやらなかったんですが、ハイデガーは無という問題意識をはっきり出していたので、これからやることはいっぱいあるだろうと思いました。無という概念は、東洋にももちろんあったわけですので、香港中文大学大学院に進学し、ハイデガー的なものをもう少し研究しようと思いました。しかし、修士課程に入った瞬間、いろいろな文献を読みながら、ハイデガーのいろんな暗いと

ころも分かりまして、つまり、学問と政治という問題をやらないといけないというふうに……。それで、修論のテーマは、ハイデガーと政治問題で行こうと思ったのですが、張燦輝先生にそれを拒否されました。張先生は、ご自身もドイツで博士号を取った人ですから、ハイデガーの前期の、特に現存在分析あたりを中心としたテクストの精読、テキストを本当に細かく解釈するという伝統を受け継いでいる方ですので、いきなり政治問題をやろうとしたら、それを許してくれなかったわけです。ですから、修士課程1年に入ったばかりのときに、ハイデガーと政治問題というテーマで考えたんですけれども、それが無理だろうというふうに言われまして、私はショックを受けたんですけれども、たまたまマックス・シェーラーという現象学者の本を見つけました。ハイデガーよりちょっと前の現象学者です。フッサールは、当時もう中国語で研究者が出始めている頃でしたが、シェーラーを研究する人は、カトリック系研究からシェーラーを研究していた劉小楓という学者の他にはほとんどいなかったんです。ですから、シェーラーについて研究しようと思いました。

張燦輝先生はそれを許してくれました。つまり、張先生の考えたハイデガーは、かなりシェーラーの影響を受けた時期がありますので、だから、シェーラーをやってもいいだろうというふうに許してくれまして。ですから、2000年に香港中文大学で出した修論は、マックス・シェーラーにおける人間と人格という問題について書いたものでした。

そうしているうちに、ちょうどそろそろ次の段階にどうするんだろうという、また実存的危機に陥りまして、当時やはり西洋哲学をずっとやっていたもので、ドイツかフランスに留学し、あっちで張先生だけでなく、たとえば関子尹先生がドイツのルール大学ボーフム、劉国英先生がパリのソルボンヌ大学で博士を取ったように、私もそういう道に入ろうと思っていたわけです。ですから、修士に入ってからずっとドイツに留学したいと思い続けていました。学部の時には、哲学科ですけれども、フランス語を副専攻にしていました。修士課程では、ずっとドイツ語と悪戦苦闘したのです。ドイツ語とフランス語をやっておけば、ヨーロッパでは何とかなるだろうというふうに思っていたのです。だから、2000 年に香港中文大学の

修士課程を修了する予定になるはずですけれども、その後、ヨーロッパに行くだろうというふうに思っていました。

でも、留学先がまだわからない中、たまたま、当時は文部省と呼ばれていた機関――今は文部科学省ですけれども――が、日本でも奨学金を出してくれるというので、申請してみたら通ったわけです。ドイツ、フランスに行こうとしても、まだ奨学金の話はありませんでしたし、日本の場合は奨学金があるということで、じゃあ、行くしかないなというふうになったのです。

日本に行くには、指導教官を考えないといけないんですけれども、当時は日本について全く何も知らなかったんです。日本哲学についても全く知りませんでした。当時の研究テーマは、日本における現象学運動というものです。それは非常に重要だと分かっていました。つまり、東アジアの哲学者たちがハイデガーとかフッサールらの現象学をどういうふうに重要視していたのか、それが研究テーマとして有意義だと思っていました。でも、日本哲学についてではなくて、日本における現象学というテーマで申請したわけです。留学先は、またたまたまですけれども、当時の日本現象学会の事務局が東北大学にあったんです。じゃあ、東北大学イクオール日本現象学の重鎮なのだろうと勘違いしてしまって、東北大学の清水哲郎先生にまず連絡してみたら、清水先生は中世哲学ですから断られてしまったのですが、同僚の野家啓一先生は受け入れるかもしれないというふうに助言してくださったので、野家先生に連絡をしてみたら、そこでご縁が生まれて、結局、この奨学金を得ながら野家先生を指導教官として研究することになりました。

石井：でも、その時は、野家先生が科学哲学出身であるということはご存じなかったんですね。野家先生は確かマッハなどをご研究なさっていますね。

張：実は全く知らなかったんです。でも、一応日本現象学会ですので、じゃあ、現象学に詳しい先生だろうというふうに思いまして、また、たまたま当時野家先生は、西田論の論文を何本も出しているところでした。まさに宗教哲学から見る西田ではなくて、科学哲学から見る西田という論法で

す。そういうことでしたので、僕を受け入れるタイミングもちょうどよかったのです。また最初の頃は、当時日本哲学の授業もなかったので、僕は普通に野家先生がやっているフッサールのゼミに出ました。フッサールの『デカルト的省察』を読むというゼミです。ほかにも、座小田豊先生のヘーゲル『精神現象学』ゼミとか、篠憲二先生のメルロ=ポンティ『知覚の現象学』ゼミとか、そういう西洋ものばっかりやっていました。

日本哲学との本当の出会いは、野家先生の個人授業の時間がありまして、「じゃあ、まず張君はシェーラーの人格と人間の問題をやっていたので、和辻哲郎を読めばよい」と言われて、和辻の『面とペルソナ』という論文を読ませてくれたことです。それが僕の最初の日本哲学との出会いでした。

石井：その時、日本語はどのくらいできたんですか。

張：僕の日本語は 1995 年から、つまり、中文大学の哲学科に入った時から、もう日本語の授業を取っていました。なぜ日本語を取ったかというと、日本のアニメとかそういう関係ではなくて、小説とか村上春樹とか、それを読みたかったからです。本当に学問とは関係なく、自分の、いわゆる専攻の哲学とは全く関係なく、まさに副専攻的な気持ちで日本語の授業を取りました。でも、副専攻がなぜフランス研究になったかというと、単に知らないうちにフランス研究の専攻の単位が足りていたからです。だから、副専攻は日本研究でもできたはずですけれども、結局フランス研究副専攻ということになりました。日本語は、日本留学が始まったとき、つまり 2000 年 4 月に東北大学の留学生センターに入って学び直しました。それ以前は、日本語を 5 年間学んだとは言っても、それしかありませんでしたし、香港での僕は会話ももちろんあんまりできなくて、授業の時の日本語も半分以上は分からなかったです。

それでも『面とペルソナ』というテキストは、今までやってきたシェーラーのものに割と似ていますので、すごく興味深く読みました。だから、これから和辻をやりたいと思うようになりました。ずっと現象学をやってきた道ですが、2000 年の時点で、そういう日本哲学、和辻哲郎という脇道が出てきたわけです。当時は、まだ大学院には入っていないです。

石井：研究生ですか。
張：研究生です。また東北大学の大学院に入る時に、野家先生から、まず「張君は前期からやってくれ」というふうに言われました。つまり、博士前期課程……。
石井：修士課程から。
張：そうですね。僕は香港中文大学で修士号をもう取ったんですけれども、「修士課程をもう一遍やってくれ」というふうに言われました。しかし、これは結局のところ非常にありがたい話です。つまり、当時の日本語能力、あるいは日本哲学についての知識が全く足りなくて、もう少しこつこつとやらないといけないというふうに、たぶん野家先生はそういう思いがあるだろうと思いまして、修士課程から、つまり、博士前期からもう一遍進学を試みました。野家先生は当時、まさに西田幾多郎をやっていましたので、和辻を研究するために、まず西田幾多郎をやらなきゃいけないという順番がありました。ですから、「まず西田幾多郎をやってくれ」というふうに言われまして、日本の東北大学の大学院に入って、2001 年から西田幾多郎でやっていくだろうという道、また脇道に行ったんですけれども、そういう西田の道に入りました。修士論文は、西田幾多郎の「私と汝」について書きました。これは 2007 年に出した博論の一部になりますが、結局、西田幾多郎の経験、他者、身体、生命について博士論文を書きました。

●香港中文大学での教育経験：講師としての道

2007 年の 3 月に修了し、またどうなるだろうという、本当に修了イクオール危機のような時期がありまして、でも、たまたま香港大学教育学部に知り合いのプロジェクトがありました。それは、広東語についてのプロジェクトだったんです。香港では、いわゆる南アジア系の人々ですけれども、香港にずっと住んでいる、いわゆるエスニック・マイノリティーとされる人がいっぱいいます。彼らはすごく英語ができるんですけれども、中国語も広東語もできないんです。香港がイギリスから中国に返還される前には、英語だけで公務員になれたんですけれども、いまは、中国語ができ

ない彼らは、公務員になる道がなくなってしまいました。大学にもなかなか進学できなくなりました。私は2000年から2007年の7年間のうち、6年間ほど、大学ではありませんでしたが、アルバイトとして、仙台にある専門学校で広東語を教えていました。香港では、ちょうどそのころに、広東語を教える経験のある人を探していたんです。たまたま運がよく、修了した頃、本当にいいタイミングで香港大学教育学部のRA的な仕事につくことができました。

でも、それももちろん本来自分の進むべき道ではないです。これもまさにすごく脇道です。つまり、日本哲学をやっていた日本留学の人間が香港に戻って広東語を教えることは、ちょっと違うだろうというふうに思いました。

でも、生きるために数か月間、こういう広東語の道をやってきたんですけれども、そうしているなかで張燦輝先生から連絡が入りまして、たまたま「講師の募集が出ていますので応募してみてください」というふうに言われまして、応募してみたら、また運がよく通ったんです。ですから、2007年の3月に修了して、4月に香港に戻り、広東語のRAを経て、8月からは出身校の香港中文大学哲学科の講師として勤めることになりました。

石井：香港中文大学では何を教えることを期待されていたんですか。

張：当時、最初のセメスターは、専門の日本哲学ではなくて、一般教養の授業を任されました。哲学科ですけれども、一般教養の授業をいっぱい開講しているので、私はそこでいきなり論理学、クリティカル・シンキング、中国哲学などを教えることになりました。

石井：中国哲学もあったんですか。

張：中国哲学と中国文化という授業を任されたんです。

石井：それは大変ですね。

張：自分の研究とは全く関係ない授業ばかりです。でも、それは非常にありがたい話だと思いました。

石井：なるほど。そのなかで学べるというポジティヴなとらえ方をなさったんですね。

張：中国哲学をそれまで本当に真剣に考えたことはなかったんです。自分

にとって、やはり勉強しないといけないものです。また、論理学は、本来私が哲学科で最初に関心をもったものだったので、教える側としてもう一遍勉強し直すことができてうれしかったです。論理とは何か。西田は、もちろん論理について彼なりの考え方があるんですけれども、授業では西田の論理学を直接教えるわけにはいきません。それでも、西洋哲学における論理学を把握する基盤に西田を置きながら、7 年間教えていました。

石井：しかし日本哲学という科目はなかったのですね。

張：でも、やがて教える機会を持つことができました。いろんな学会とか研究会をやっていた成果として、後に主任になった関子尹先生から、「日本哲学ならば、一般教養じゃなくて、哲学科で日本哲学という授業もやりましょう」と言われまして、初めて教えたのがたぶん 2009 年だったでしょうか。

それより前には哲学科で「哲学的人間学」という授業を 1 回担当したことがありました。また、2010 年にデカルトの『省察』をラテン語のテキストを対照しながら英訳でやりました。香港では哲学科の授業は大体英訳のテキストで行われているのです。

2011 年でしょうか、「西田幾多郎」という授業も担当することができました。9 割以上の授業が一般教養科目だったのですが、哲学科の授業としては、デカルト、シェーラー、西田幾多郎、日本哲学、さらには「愛の哲学」というのもありました。

石井：「愛の哲学」の話は前に香港を訪れた際に張さんから聞いたことがあります。

張：Philosophy of love。一般教養にも同じ名前の授業がありました。ほかには、映画の授業、Philosophy of films という授業も担当しました。哲学科の 7 年間、回顧すれば、本当に日本哲学だけではなくて、いろんな哲学を教えていました。サッカーで言えば、大体自分の役割は、キーパーとかディフェンダーとかがあるでしょう……。

石井：全部をやったんですね。

張：フリーマン。全部をやったということでした。今、自負ではないですけれども、こういう機会も実は非常に貴重で、あるいは今、駒場では教養

という授業を担当する側にはなっているんですけれども、全く拒否感はありません。むしろ、これは非常に重要だと思います。つまり、大学の教える側としては、専門はもちろん重要ですけれども、いろんな授業、いろんな学生と対面する。そういう経験が実は大学でも絶対重要だと私は思います。

石井：少し香港中文大学の哲学についてお聞きしたいのですが。張さんが学ばれていた時と教えていた時を合わせた十数年のお話を聞いていると、ヨーロッパ大陸の哲学を学ばれた方が多いようなイメージです。張燦輝先生もドイツ哲学ですし、あとフランスで学位を取った先生もいらっしゃるということでしたね。大陸系哲学の人たちがメジャーだったんですか。英米系の分析哲学は、特に中国哲学にも大きな影響を与えているのではないかと思うのですが。

張：いわゆる当時の哲学科における中国哲学関係の研究者としては劉述先先生が、僕の学部時代にはまだ教えていました。あとは馮耀明先生、僕の中国哲学史の先生でした。

石井：やはり分析系の先生ですね。

張：分析系です。完全に。今は Analytic Asian Philosophy がはやっていますけれども、Analytic Chinese Philosophy の元祖は馮耀明先生だと思います。僕の習った中国哲学は、例えば、易経思想とは何かと。易経思想は自然主義の誤謬だと。つまり、自然とはこういう構造であって、そのまま人間にもこういう構造になっているんだいうが、そういう推論はできないんだということです。中国哲学史の授業では、馮耀明先生がそういうふうに教えてきたわけです。当時の私も、それにすごく興味を持っていたんですけれども、でも、興味を持っていたのは、中国哲学ではなくて、分析系の方法でした。

香港中文大学の哲学科には三本頭と呼ばれる構造がありまして、伝統を形成していました。１番目がこの中国哲学で、2 番目はヨーロッパ哲学、3 番目は分析哲学でした。

石井：その 3 つは、大体勢力としてはバランスを保っていたのですか。

張：大体、はい。

石井：でも、そこにはもちろん日本哲学などは当然なかったわけですね。
張：なかったですね。
石井：だから張さんがそこに入ったというのは、ある意味すごいなと私はずっと思っていました。すごく不思議なことだったと感じてきたのです。
張：入ったのは、運というわけではないですけれども、まず日本哲学の人材を狙ったわけではなくて、まずいろんな授業を、特に一般教育を担当できそうな人を探していたんです。
石井：たしかに張さんは何でもできそうですものね。
張：僕は、結局最初の 2〜3 年間は、うまく教えられなかったんです。専門とはかなり外れたものもありましたから。しかしそれもまたいい経験でした。つまり、どういうふうにいい授業を出せるのかがんばっていましたが、本当に最初の頃は、うまく教えられなかったです。
石井：話が戻りますけれども、これが博論ですよね。
張：『西田幾多郎——跨文化視野下的日本哲学』〔西田幾多郎——トランスカルチュラル・パースペクティヴにおける西田哲学、国立台湾大学出版センター、2017 年〕という本ですね。
石井：これはどういう内容のものなのですか。「私と汝」の分析らしきチャプターがありますが。
張：「私と汝」も入っていますが、野家先生の影響を受けて身体論、行為的直観とか生命などの視点や後期の西田が宗教問題だけではなくて、科学哲学的な視点を持っていたことなどについて論じています。
石井：でも、政治の問題にも関わっていますね。第 1 部のいちばん最後は戦争に関する議論のようです。
張：そうですね。戦争に関しても、つまり、場所的な論理です。こういう主客未分とか主客合一とか、あるいは善と悪を超えるとか、そういう構造、そういう論理になっているんです。
　私の考えでは、これは第三の立場というんですけれども、つまり、極端、両極的な立場じゃなくて、それを融合する、それを超える、超越する、そういう立場になります。そうすると、結局、善と悪が曖昧になってしまって、あるいは仏教もそうですけれども、善悪を超えてしまうと、そういう

政治的なことが非常に危うくなってしまいます。西田もたぶん同じような罠にはまってしまったんだろうというふうに私は解釈しています。
石井：張さんの研究スタイルの幅の広さがどういうふうに形成されてきたのかが、ちょっと分かってきた感じがします。つまり、もともとは自然科学のほうに関心があったので、そこから科学哲学とか分析哲学に進む可能性もあったんだけれども、そうはならずに。
張：脇道ばかりに逸れています。
石井：脇道に、張燦輝先生の影響の下で。
張：現象学もやりました。
石井：ハイデガーからシェーラーへという現象学の方向へ進んでいったと。その後は野家先生に出会い、その前に日本語に対しては別に関心があったので、たぶんそれはきっと今でも日本文学とか、映画を含む日本のサブカルチャーの研究、さらには次にお尋ねする予定の、哲学科から日本研究学科に移った後のいろんなお仕事にも関わってくるわけですよね。
　野家先生に出会って、そこで一つ大きな転換があったようなんですけれども、まあでも、それはある意味現象学の継続でもあったんですよね。東北大学は、もう間違いなく高橋里美以来、新田義弘、木田元らが輩出した、日本における現象学の中心の一つだと思うので。
張：もちろんそうです。
石井：そういう意味でも偶然かもしれないけれども、張さんにとっては非常にいいところに進んでいったということで、しかも、野家先生は、先ほどちょっと申しましたけれども、科学哲学のご出身でもありますし、張さんご自身の実存的な不安に発する学問的な関心と、脇道を進まれながらだけれども、偶然の出会いというのがうまい具合に全ていい方向に作用しているという感じなんですね。
張：そうですね。野家先生も結局理学部出身でした。
石井：そうですね。
張：野家先生は大森荘蔵に師事したこともあって駒場とのゆかりもありますし、そういう関係で、教養の広さとか、読書の量とかが非常にもう想像できないほど本当に膨大で、生きている辞書みたいな方です。しかも、文

学にも実はすごく詳しいらしく、ご自身で俳句も詠まれますので、そういう教養、あるいは学問に対する広さと深さは香港の人間にとっては想像を超えるものです。なぜなら、香港では一つの狭い分野を選ばないといけないからです。中国哲学かヨーロッパ哲学か、あるいは分析哲学かといった具合に狭い分野の専門家になるのですけれども、野家先生が示した道は、現象学をやりながら、科学哲学もやる、日本の哲学もやるということだったのです。本当にたまたま野家先生が指導教官だったというのもあるんですけれども、影響は非常に大きかったと思います。

石井：張さんと駒場の先生方との交わりを横で見ていると、坂部恵先生を通じて、UTCP の先生と同じ関心を共有できているようなイメージがすごくあります。坂部先生ご自身は駒場の先生ではなかったのですが、例えば和辻の『面とペルソナ』にしても、これは坂部先生抜きには論じられないテーマです。坂部先生の張さんに対する影響というのは、やっぱり随分あるんじゃないかなと思うんですけれども。

張：非常に大きいです。1 回だけ仙台でお目にかかったことがありまして、2006 年に東北大学で開催された日本哲学会のシンポジウムで、「近代日本哲学のポテンシャル」というテーマでしたが、坂部先生が提題者でした。「いつか来た道」のお話をなさっています。その時に野家先生が紹介してくれまして、いろんな話で非常に盛り上がりました。その中に今でも鮮明に覚えているシーンがあります。たぶん懇親会とかなにかで、みんながもう酔っ払っていたと思うんですけれども、誰かが演歌の話を始めました。そうすると、坂部先生は「張君、演歌をもっと勉強すればいい」と言われたのです。

石井：演歌ですか。

張：そうです。なぜかというと、そこにはやまとことばがいっぱい書かれている。つまり、私たちがやっている学問の世界は漢語ばかりで、坂部先生が批判している日本哲学者のうち駄目なものの代表は、西田幾多郎だったのですが、ともかく哲学用語は全部漢語ばかりだというのです。和辻はむしろやまとことばを積極的に取り入れていた例です。演歌の話自体は冗談の可能性もありますけれども、このシンポジウムでの坂部先生の発表は

まさにそういう内容でした。つまり、やまとことばのポテンシャルに関するご発表だったのです。後に私も関連する論文を書きましたし、また和辻哲郎論もありましたから、ご発表を聞いて非常に刺激を受けました。本当は香港に来ていただきたかったのですが、残念ながらご病気で実現しませんでした。

また北川東子先生も、2011 年の「Japanese Philosophy as an Academic Discipline」国際シンポジウムにも参加いただきたいという希望があったのですが、ご病気になられてかないませんでした。本当は対話の可能性をさらに広げることができたんだろうと思いますけれども、残念ながら、そういう機会を逃してしまったんです。

石井：坂部先生のやまとことばの哲学というと、UTCP から派生した科研費研究「グローバル化時代における現代思想――概念マップの再構築」（基盤研究 A・研究課題番号 24242002）の香港会議がありましたね（後述）。わたしたちはこのプロジェクトを CPAG と呼んでいましたが、そこでは、最終的に動詞から出発する哲学というところにまとまっていき、『ことばを紡ぐための哲学』（白水社、2019 年）という本になりますが、当初現代思想の再マッピングということを考えたときに、やまとことばの哲学を考えた坂部先生の後に、じゃあ、日本における哲学の言語をどうやってさらに開いて、もう一回日本語から哲学を構想するのかというのが、課題意識としてあったと思うんですね。

張：それは 2018 年 1 月に開かれた香港会議「Contemporary Philosophy in the Age of Globalization」における中心的な議題でした（https://cpag.ioc.u-tokyo.ac.jp/events/post/20130118_cpag/）。

石井：そうですよね。

張：ついでに他の本も持ってきました。これは 2014 年に CPAG から発行されたブックレットです（*ANU Workshop: After New Confucianism: Whither Modern Chinese Philosophy ?,* Contemporary Philosophy in the Age of Globalization vol.4 ）。この時、僕は労思光の文化哲学について書きました。オーストラリア国立大学で 2013 年 9 月に開かれたワークショップの論文集です。

石井：Fabien Heubel さんたちといっしょに行った時ですね。
張：はい。それでちょうど当時は、香港中文大学の日本研究学科に移っていたと思います。
石井：そうですか。当時の私の印象として、張さんが日本研究のほうに行かれたのは、311 のこともあって、急速にフィールドを主体とするようにスタイルを変えていったころで、「哲学する」と言えばいいでしょうか、そちらの方に転換していったのだと思っていました。時期的には大体シンクロしていると思います。想像するに、哲学科から日本研究学科に移ったことで、ご自身の研究の在り方も随分変えなきゃいけなかったという中で、だいぶ葛藤されながら、そのスタイルを選んだんじゃないかなというふうに思うんですけれども。
張：そこにはいろんなエピソードがあります。香港の当時の制度では、契約制だったとは言え、雇用を延長することができました。けれども、簡単に要約しますと、哲学科をもう 7 年間ぐらいやってみて、このタイミングで、またしても実存的危機が来てしまいまして、まだ哲学科でやるか、あるいは日本研究学科でやるかということを考え始めたのです。そこでチャンスを与えてくれたのが呉偉明先生でした。当時日本研究学科は、教員の入れ替わりが激しく人手がちょうど足りていなかったものですから、日本文化とかを教えられる人を探していたんです。私もたまたま、もうまさに震災関係で、当時日本研究学科にいらした先生方とも交流がありました。例えば Stephen Nagy 先生です。いまは国際基督教大学にいらっしゃって、先週土曜日（2020 年 12 月 20 日）には駒場の GSI で僕と一緒に発表しました（https://www.gsi.c.u-tokyo.ac.jp/en/event/2812/）。あの先生は、当時日本研究学科にいました。彼は実は私の剣道の師匠です。
石井：剣道？
張：カナダ人ですけれども、彼は、もう段を持っていて、私は日本研究学科の Stephen Nagy 先生のところで剣道とかを習ったんです。いま思えばすごくいい研究仲間がいました。哲学科も出身学科ですから非常に愛着があったけれども、日本哲学だけをまだやり足りないというか、哲学科では、

やはり哲学であって、日本的なものは非常にやりにくいとずっと感じていましたので、この新しい日本研究学科では、もっと日本的なものができるだろうというふうに期待していたんです。それはもちろんそうだったんですけれども、結局哲学的なものはあんまりできなくなってしまった。つまり、日本研究学科ですから、担当する科目は、例えば、日本文化、日本映画、日本文学などで、いちおう日本哲学も担当できたのですが、哲学はあくまでも部分的なものでした。哲学よりももっと広い文化論的な授業を担当しないといけなくなったのです。でも、いろんな機会で日本を研究する、日本のことを考え直すということで、次の 6 年間には日本研究学科でいろんなことができました。特に日本研究学科の恩恵で、日本でのフィールドワークを非常に支援してくれまして、いろんな現場を見る、つまり私の考えでは「巡礼」ですけれども、そのための非常にいい条件がそろったということですね。

●「巡礼」の思想：哲学の可能性として

石井：実際にそのころから毎年のように東北の被災地に学生さんを連れていってフィールドワークをするということを始められて、それが「巡礼」という概念に昇華していきますよね。
張：はい。
石井：今年（2020 年）6 月 5 日に行われた EAA の学部生向けオムニバス講義である学術フロンティア講義「30 年後の世界へ——「世界」と「人類」の未来を共に考える」(https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2020-3043/) の時にも、巡礼をテーマにしてお話しなさったんですけれども、そういう意味では、日本哲学で博論を書いた張さんが、日本という経験自身を哲学するほうにぐっとシフトしていったのが今の姿なのかなというふうに思います。

一方で、巡礼に関する話を聞いていると、どうやら巡礼をする中で、張さん自身の香港のアイデンティティーが問題化されてきているようです。つまり、あの学術フロンティア講義の中で、ちょっと私も驚いたんだけれ

ども、香港というトポスで育った自分が東北の被災地とつながっちゃうという話をなさったんですよね。あれは巡礼という概念を通じて、もう一回香港のアイデンティティーに出会い直すということがあったと考えていいんですか。

張：巡礼は、坂部先生に影響を受けて、和辻に戻って発見したものです。政治的な社会の中ではいろんな制約があります。例えば、仏教が弾圧されている中で、あえて奈良のお寺を巡る。ただ和辻的な言い方だと、そうすること自体は必ずしも学問的なものではありません。でも、私はむしろこれが哲学のもう一つの可能性であるだろうと認識したのです。また大きなテーマとして、野家先生とのつながりですけれども、巡礼は見るだけじゃなくて、物語を採取する、あるいは聞くということも非常に重要です。物語ですとそこに歴史があるのですが、一方で何らかの原因で忘れられた物語があるわけです。そうすると、それをよみがえらせるという行動が巡礼の核心だと思われます。そういうことがだんだん、昇華というか、自覚されてきて、結果的に香港とつながったわけです。

石井：巡礼という行為は、よその人間がそこに入っていくわけですから、時にそれはある種の暴力的な行為であると捉えられるかもしれません。しかし、巡礼することによって、訪れた先の土地の忘却されたものや、逆に忘却できずトラウマとなってしまっている記憶などといったそう簡単に物語にできないことを物語れるようにする一つのきっかけになるかもしれないというわけですね。

張：まさにそれです。一つの例を挙げますと、2014 年に創刊した『希哲雑誌』の第 1 号があります。これです（https://sites.google.com/view/kitetsumagazine）。

石井：これは被災地の何もないところが写真になったのですね。

張：閖上（ゆりあげ）というところです。しかも、この写真は左右が反転しているのだと石井さんはすぐ分かってくれました。

石井：そうなんでしたっけ。

張：この写真を撮影したときにはまだ哲学科にいたんですけれども、その

翌年に日本研究学科に入りました。つまり、2013 年の巡礼ですね。福島の被災地、田村市に入っていって、当時の仮設住宅を見に行ったんですけれども、当時本当にもう交流があり過ぎてもう嫌だという被災者が非常に多くて、最初は交流はなしで、代表者とだけ話したのです。男性 3 人の代表者でした。いろんな話を話して、それで終わりという予定だったんです。でも、なぜか分からないですけれども、その話が終わった後、まさに帰る瞬間、今度は女性たちが集まってきて、「じゃあ、話でもしましょう」ということになった。僕もすごくびっくりして、当初そういう予定もなかったですし、ご迷惑をおかけするだろうと思って、あえてお土産とかを持たず、いきなり行ったんですけれども、話しましょうと。

恐らくたぶん外国の方、Saulius Geniusas 先生というリトアニア人の先生もいらっしゃったので、外国の方ですから気楽に話してくれるということもあったんだろうと思います。また、山口潔子先生も当時同席されまして。

石井：水彩画家の山口潔子先生ですね。

張：当時はまだ中文大学の歴史科にいらっしゃったんですけれども、山口先生も聞き手として非常にうまくて、関西出身の可能性もありますけれども、すごくいい話をいっぱい聞けたのです。3 人の男性の代表者と話した内容は、大体新聞紙でも読める内容ばかりですけれども、でも、偶然にできた、その交流の場、仮設の一角でみんな集まってくれていろいろ話ができたこと、いろんなもっと立派な話を聞くことができました。

石井：閖上には私も連れていってもらいましたからね。

張：2015 年でした。

石井：もうあのときのお寺もちゃんとあれも再興されたんですよね。

張：浄土寺はもう再建できました。またイチゴの農場にも行きました。亘理郡山元町のいちご農園株式会社 GRA です。仙台にある一般社団法人 MAKOTO という会社にも行きましたよね。

石井：はい。

張：MAKOTO の社長さんは、僕の仙台にいた頃のサッカーの仲間です。

石井：そうなんですか。起業家の竹井智宏さんですね。

張：そうです。本当に偶然な出会いと脇道ばかりの私ですけれども、今考えれば、全部実はつながっています。不思議です。
石井：そうですね。その辺はやっぱり EAA でやっている石牟礼道子読書会ワークショップでも、とっても張さんから伝わってくる感じがします。そういうことなんですね。
張：日本研究学科に在籍していた頃、日本環境問題という授業がありまして、担当する人がいなくて、私が担当することになりました。私もいろんな文献を読んで、水俣だけではなく田中正造の頃から授業でやろうとした。やはり全部がつながっているんですよ。忘却問題、福島との関係。それらは結局全部つながっているのです。日本研究学科がなければ、石牟礼研究会もたぶん探していなかったかもしれないです。日本文学とかも、ずっと学部生からの趣味だったんですけれども、授業を担当することになると、やはり広い意味の文学、広い意味の哲学をそれぞれどういうふうに考えないといけなくなります。最近は、坂部恵先生の考えにもあったように、哲学は、結局文学の中の一部じゃないのかなと考えています。
石井：哲学は文学の中の一部。
張：われわれの考えでは、哲学は全部なんか学問の父親的なものなんですけれども、坂部先生は、むしろ文学つまり大きな意味の littérature がありまして、その中に哲学が入っているとお考えでした。フランスもそうですし、日本でも昔、哲学という言葉がなかったころには、文学の中にいろんな哲学的な思想が入っていたわけです。それも哲学科にずっといたら、そういう立場は絶対にあり得ないと思っていたかもしれません。
石井：今、日本だと、基本的に文学部の中に哲学科があって、まあ基本的には文学の中に哲学があるという構造ではあります。私は分かりませんけれども、坂部先生が文学の中に哲学があるとおっしゃっているのは、そういう構造とは重なりつつも、きっとちょっと違う意味なんですよね。
張：もちろん。そういう、例えば、フランスの哲学は非常にたぶん狭い意味で、しかも東洋ものは大体入っていないですけれども、それは文学という本当に膨大な littérature、あるいは écriture の中に入っていると坂部先生も考えたわけです。

石井：文に関する学問としての哲学ということですね。
張：そうですね。

●移民都市香港と新亜書院のこと

石井：なるほど。さきほどお尋ねした、巡礼を契機とした香港アイデンティティーとの出会い直しについて、もう少し聞いてみたい気がします。香港は、もともと移民の人たちというか、外からやってきた人たちが築いてきた街だったと思いますし、それが今日にまで続いているのだと思います。きょう張さんは、実存ということばを何度も使ってこられましたが、張さんにとって、香港というトポスは実存に関わってくるのか、もしそうだとしたらどのように関わってくるのかについて、お話しいただけますか。
張：香港の話をどういうふうに語ったら……。
石井：あんまり難しく考えないでください。
張：最初は、たぶん新亜書院の話になると思うんですけれども。
石井：そうですね。そこに結び付けたほうがいいかもしれませんね。
張：香港の話ですね。まあ個人的な話はともかく、つまり、まさに家系も、祖父がやはり広東省の広州の近くにある南海というところから香港に来ていたわけです。
石井：康有為の出身地ですね。
張：南海十三郎とか、そういうところです。これもたぶんいつか話したと思うんですけれども、回教系ですね。回教系の広東人ですけれども、もともとの名字は、馬（マー）でした。もともとはマーさん、つまり、モハムッド。中国ムスリム系、回教系の人はマーという名字が非常に多かったんです。私の祖父もそうだったんです。いろんな原因で張という家の養子になって、また回教徒ではない祖母と結婚したので、父親の時はもう特に回教ではなくなってしまって。また香港に来て商売とかをやっていました。僕は祖父と会ったことはないんです。生まれた時はもう他界していました。父親は小学校の先生で、後に校長までやりました。でも、まさか自分もこういう教育の人間になるとは思わなかったです。これだけは脇道ではなかったか

もしれない（笑）。

ですから祖父もたしかにそういう移民でした。香港における移民については、中華人民共和国が成立した 1949 年が非常に重要だと思うんですけれども、その当時、いろんな人が香港にやってきたんです。いちばん多かった理由としてはとにかく生きるためでしたので、やはり商人が多かったです。

つまり、商売する人が、共産主義だと自分の財産がどうなるかという心配があったのです。僕の祖父も一応商人でしたが、太平洋戦争の前にはもう香港に来ていました。でも、やはり移民のもう一つの理由は亡命かもしれません。文化的に中国文化を守らないといけないということで、香港にやってきた移民がいるわけです。新亜書院の創設者である銭穆や唐君毅あたりも全部その年に入ってきたわけです。私も香港中文大学に入ったんですけれども、その当時の所属した書院は新亜書院でした。新亜書院の創設者たちは、現代新儒家と言われる学者が中心で、中国の伝統文化を香港で守ろうとしたのでした。もともと独立した組織だったのですが、のちに香港中文大学に吸収されていきます。私はその新亜書院に香港中文大学の学生として入ることになったのです。

日本の方には少しわかりにくいと思いますのでもう少し説明しますと、中文大学の学生は全て、専門を学ぶ学部だけではなく、寮生活を送る場として書院に所属することになります。大学には複数の書院があるのですが、当時、哲学科の学生は崇基学院か新亜書院のどちらかを選ぶ決まりがありました。

石井：崇基学院は「学院」という名前ですが、カテゴリーとしては香港中文大学にあるいくつかの書院の一つ、しかも最も老舗の書院ということですね。たしかキリスト教系だったと思いますが。

張：そうです。それで、さっき敢えて言わなかったんですけれども、僕の実存の危機の一つには、宗教の危機があります。

石井：そうなんですか。

張：恥ずかしいですけれども、セカンダリースクールの最後の 1、2 年、つまり 6 年生、7 年生の時に、周りにキリスト教徒がいっぱいいまして、

「張君も教会に行こうよ」と言われて。
石井：そうなんですか。
張：僕はそのなかで、それは違うだろうという議論をする側になってしまって。後に論理学に興味が生まれたのはそこから来ているのです。
石井：そういうことなんですか。それは面白い話です。
張：議論とか論争、あるいは fallacy、つまり、誤謬。神の存在証明ですね。私はこれが誤謬だとあえて言っていて、ですから、やはり宗教的なものは、ちょっと抵抗がありました。だから、新亜書院に入ったわけです。
石井：でも科学と宗教というふうに分けて考えた場合、科学側に行ったわけではないんですよね。だから、宗教ではないものを哲学に求めていったというのは面白いところですね。
張：でも、入った瞬間、これが正しかったと思いました。つまり、科学だけではなく、むしろ、広い意味での人文精神ですかね。神じゃなくて、こういう人間、あるいは文化をどういうふうに守るのか。私は香港が中国に返還される前の世代ですから、1989 年から 1997 年のころに、自分達は中国人になるんだという流れ、あるいは当時の社会的な雰囲気がありましたので、新亜書院に入るときには、そういう中国文化への関心もあったと思います。今の若者にはこういう感覚はないかもしれないですけれども、自分たちの世代は、そのうち香港が中国になるんだということを受けとめなければならない世代だったと思います。
石井：大学の学部を卒業する頃が、ちょうど返還の頃ですか。2000 年に修論ですよね。返還は 1997 年のことでした。
張：学部の途中ですね。1998 年卒業だったんで。だから、大学の途中で返還を迎えたのです。
石井：そのころ香港の街としては、返還を歓迎している雰囲気だったんですか。
張：ええ。歓迎しない人は、もう全部移民していたはずです。
石井：そうですよね。
張：残っている人は、もうあきらめるしかないけれど、でも、一応植民地時代は終わるんだということで、歓迎していただろうと思います。

石井：複雑な感情ですね。植民支配下の人間ではなく、中国人に戻れるんだというのは、アイデンティティーを取り戻すという意味もあったと思いますが。
張：1989 年のあれもありましたので〔天安門事件のことを指す〕、どうなるんだろうか、この返還は希望なのだろうか、本当にこれでいいのだろうかという、まさに危機だったのです。私が入学した 1995 年には、例えば、労思光先生はもう香港を離れたわけです。
石井：台湾に行かれたのですね。たしか最後は台湾で亡くなりましたね。
張：私が入学した時、労先生はもう台湾にいました。
石井：そうなんですね。
張：だから、学部生の頃、労思光の授業を一度も聞けなかったのです。むしろ、馮耀明先生の授業では、労思光の『中国哲学史』をすごく批判していたわけです。労思光の解釈を分析哲学から見れば間違っていると、そういう授業ばかりでした。
　また新亜書院の話に戻りますと、後に分かったんですが、彼らが新亜書院をつくったのは、中文大学よりも早かったのです。
石井：そうですね。
張：中文大学は香港大学に次いで、1963 年に香港の 2 番目の大学として作られたのですが、新亜書院は 1949 年に創設されています。香港には、こういう重要な歴史があるんです。いろんな人が香港に来ました。唐君毅のことばによると「花果飄零」（花や果実が本来あるべき場所を失って漂うこと）、つまり、ディアスポラ的なことですね。イギリスの植民地だった香港は、中国文化をうまく守ることができなかった、まるで他の人の庭のような場所であったという悲しい感情が新亜の人々にはあったわけです。私の大学に入った頃、新亜精神とも言うべきそうした雰囲気はもう非常に薄くなってきたんです。1949 年から 1963 年までの間には、経済的に恵まれていない頃もあって、Yale in China のように新亜書院はアメリカからいろいろな寄附金をもらって援助されています。
石井：学問に対するアメリカからの援助については日本でも、冷戦時代に随分問題になったことがありました。

張：たぶん同じような構造で新亜書院を狙っていたんですけれども、たしかに新亜にはそういう経済的に恵まれていない時期がありました。新亜書院の校歌の一節には「手空空、無一物、路遙遙、無止境」（手は空っぽで物一つさえ持っていない、道は遙かで、とどまるところがない）という歌詞があります。これは道の話ですけれども、道は長いが出口がない、最後には社会も場所もないという、まさにディアスポラ的な感情だったんです。でも、この苦難に満ちた厳しい時代のなかで、伝統主義が新亜の精神になりました。たぶん恵まれていない環境だったからこそ、新亜精神が成り立っていたわけです。90 年代の返還前と言えば、新亜書院は経済的にもだんだんよくなっていた頃ですし、中文大学の一部になっていましたから、大学からの援助もあります。ですから、困ることは何もなかった時期です。そういうなかで、新亜精神はもう死んだという議論ももちろんあったわけです。私たちも当時やはり新亜精神はよく分からなかった。もう返還の手前ですから、そういうディアスポラ的な実感は全くなかったです。

石井：新亜研究所がいまでもありますが、新亜書院が香港中文大学に合流することを拒んだ人たちが新亜中学と共にそこに残ったのでしたね。一緒に行かせてもらいましたね。

新亜書院というのは、ディアスポラであるがゆえの人文精神を育んだということでしたが、一方で、新亜書院というのは、私などはもっと非常に普遍的な人文精神を目指していたのではないかと思います。彼らの出発点は、儒家の文化を中心とする中国の伝統文化ということだったと思うんだけれども、でも、そうは言っても、そこから何か普遍的な価値を見いだすというか、普遍性に対する信頼があって、香港から普遍的なものをもう一回つくり直そうという気概が新亜精神の中にもあったんじゃないかと想像したりします。というか、私たちもそれを探す必要があるんじゃないかなという気がします。

張さんのように、最初は中国哲学に全く関心もない、興味もない、知識もないという人が偶然のことから香港中文大学の哲学系に入って、しかも、カレッジとして新亜書院を選んで、人文精神に触れるわけですよね。そうすると、この辺り、特にもともと自然科学的な普遍を目指していた張さん

と人文精神の出会いというのは、どういう意味があったんでしょうね。
張：まさに今、普遍という言葉がありましたが、これは労思光がよく唐君毅を批判していたポイントです。つまり、何が普遍であるかというと、伝統的な価値が実は普遍性、つまり、普遍的なものがあるんだというのです。仁とか義とかそういうものを過去のものではなくて、この 20 世紀、あるいは 21 世紀においても、世界のどこでも通じるんだという普遍性ですね。唐君毅あたり、つまり、新亜書院の先生方は、それは絶対持っていたわけですけれども、労思光はむしろそれ違うだろうというふうに言いまして、つまり、普遍性が今でも有効であるという主張であれば、なぜ中国文化がこんなに弱まっているのかと問うたのです。普遍的に有効な伝統的な価値が今の中国でも生きており、しかも有効であるものが存在するどうかが問題です。
石井：その場合、コアになるのは何ですか。
張：例えば、唐君毅あたりが強調するのは、理という精神とか、儒教の核心的な概念である仁とか、中国文化の核心にある儒教的な思想は普遍性を持っているから、ディアスポラ植民地だった香港でも、場合によっては、日本でもそれが通用するんだと考えました。しかし労思光あたりから考えると、それが普遍性をもつということ自体はいいとしても、ではなぜ中国文化がやはりこんなに落ち込んでいるのかという問いが出てきます。普遍的なものはいいんですけれども、その有効性は疑わしいので、やはり失効した普遍性ですね。これではうまく解釈できない、そしてそれが儒教の一番大きな問題だと労思光は考えました。

新亜精神が果たして普遍的であるかどうかという問題も非常に重要であって、つまり、恐らく特別なディアスポラ的な背景があったから、最初できた頃は、やはり普遍性までにはなっていなかったかもしれないです。困っている時であろうと、豊かになった時であろうと通じる同じ価値観が実はあるのだということを、中国哲学をやっている者としては証明しないといけない。こういう労思光的な問いですが、それが結局どういうものかというと、まだ証明できていないというのがたぶん一番大きな問題だと思います。

石井：そうすると、新亜精神は大学生活の現場では具体的にどういうかたちで表現されるのですか。
張：例えば、新亜書院の学生は大学で新亜の一般教育授業を取らないといけないんですけれども、当時は STOT という授業、つまり、Student-Oriented Teaching and Seminar という授業がありました。つまり、昔中国にあった書院もそうだったと思うんですけれども、少ない人数で、いろんな小さい輪の中で、先生と学生の緊密的な関係で、一方的ではなく、互いに考えるのです。時代と共に科目の中身は変わっていくだろうと思うんですけれども、こういう書院的な発想は変わらないだろうと思います。僕のときもそういう小さい授業がありましたし、ほかにも旧正月の時に必ず先生のところに「拝年」（新年のご挨拶）に行くとか、そういう人間関係のつくり方です。人倫という概念が儒教の核心にはありますが、そうした関係は決して概念ではなく、書院という学びの中で実践するんだという、それがたぶん新亜精神の具体的なやり方だと思います。
石井：これは新亜書院以外に別の書院でも行われていましたか。
張：新亜は、特にこれを強調していました。しかし、僕のいた 1990 年代は、大学が大きくなっていたので、それがだんだん機能しなくなった頃だと思います。昔はもっとできたと思います。先生方との関わりもそうです。私のちょっと上、たぶん 10 年ぐらい前の先輩たちは、やはりもっと先生との関係がよかったんです。私のような返還前後の人間は、先生との距離がちょっと開いてしまったという、そういう時期だったんです。張燦輝先生は、新亜書院の先生ではなく崇基学院の先生でした。
石井：先ほど新亜書院の授業とおっしゃっていましたけれども、哲学系に所属しているけれども、哲学系の授業以外に書院の授業も出ていたということですね。それは必修単位なんですか。
張：はい。非常に複雑な構造ですけれども、つまり、中文大学の学生には、専門科目のほかに一般教育というものがあって、在籍中にいつでも取れるんですけれども、それらの中には、大学側が提供する一般教育以外に書院が提供する一般教育があります。それで書院の科目も単位を取らないといけないんですよ。私の場合は新亜書院が提供する一般教育も受けないとい

けない。
石井：そのなかで STOT という教育があったわけですね。
張：それに加えて講義もありましたし、biweekly assembly、つまり、2 週間に 1 回の集まりがありました。それは大体堅い講義じゃなくて、書院全員集合参加ですよね。
石井：何人ぐらいいるんですか。
張：1,000 人規模です。
石井：そんなにいるんですか。
張：一番大きい大講堂でも入りきらないので、小さい講義室に分かれてやって、さらに全員集合の講義もあります。社会からいろんな人をお招きしてやるのです。僕の頃は社会問題に関する講義が多かったです。ただ私にはそれがちょっとつまらなくて。つまり、例えば経営とか、それも重要なんですけれども、何で新亜がそれをやるのかと思っていたので、そういうテーマにはあんまり興味がなくて、大体さぼっていたんです。
石井：1,000 人ぐらいの人たちが全員寮に住んでいるんですか。
張：いや、寮は、やはり足りません。当時は 3 棟しかなかったので、僕は実家がたまたま屯門というすごく遠いところにあったので、3 年間も寮に入れました。あるいは、家庭の収入によって入りやすい場合もあります。でも新亜書院はすでに香港中文大学の書院になっていましたので、学生の数はすごく多いのです。新亜が本来目指した小さい書院ではなくなってしまった。それに加えて大学院も持っていません。だから、新亜が目指した書院は、中文大学に組み込まれた時点で、死んでしまったと言えるのかもしれません。

個人的な考えですが、もしそのまま新亜が中文大学に入らず頑張れば、今は新亜大学になったかもしれません。来年（2021 年）の 2 月に予定されている EAA ワークショップ「哲学としての書院」（https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/shuyuan-zhexue-jpn/）では、私学と公学、あるいは香港の制度に即して言えば私学と官学の違いについてお話しするつもりですが、新亜がもともと目指した学問は、恐らく私学モデルだったんです。唐君毅もいきなり公学の枠組みに入ると失敗するだろうと書きました。でも、

彼にしてみれば、当時の状況としては、官学化に希望を託すほかなかったのですが、その後これではやはりダメだと気づいて、もう一度私学にもどすべきだという考えを持っていました。

石井：でも、少なくとも官学の体制下でも、例えばSTOTみたいな授業があったりとかということで、少しでも私学の雰囲気を残してはいるんですよね。今でもそれはあるんですか。

張：今もありますよ。ただし、大きくなってしまったので、そういう新亜精神的なものをうまく持続的に展開できないのが、中文大学の今の難しいところです。今は中文大学には若干規模が小さい書院があります。晨興書院とか善衡書院のように寄付金でできた新しい書院ですけれども、そういう書院がありますので、全員寮に入れるしくみになってはいます。そういう書院の規模は数百人規模なので、人文的な精神的な理念が必ずしもはっきりしているものではないです。

石井：まあ大学自体が非常に大きいですからね。香港中文大学だけではなく多くの大学が抱えている問題かもしれないですね。

張：小ささを目指すということも東アジア藝文書院の一つの可能性かもしれないです。大きくすれば、それもいいんですけれども、大き過ぎると、結局、新亜書院が直面したような問題が出てきてしまうかもしれません。

石井：いや、費用対効果が問われてくると小さくすることが難しくなります。そこがやっぱり一番大きな問題ですね。オンラインのテクノロジーをうまく使って、すごく大きいものとすごく小さなものを融合することができるかもしれないなと考えることはありますが。

張：でも、東京に来て、対面の授業もやってきて、そういう小ささは、非常にいいなと思いました。

石井：適正な規模というのはどのくらいでしょうね。

張：今EAAの東アジア教養学プログラムで開講している「東アジア教養学理論」と「東アジア教養学演習」は10名前後です。授業としては、すごくいい規模です。

石井：そうですね。ひとつのクラスのサイズとしては、たぶん10名以下が理想的なんですよね。

張：それは理想ですね。
石井：STOT はどのぐらいだったんですか。
張：STOT も大体 10 名ぐらいだったでしょうか。
石井：言語は何語でやるんですか。
張：中文大学は、僕のいた頃は、ほとんど全ての講義は広東語でした。
石井：広東語でやるんですか。でも、それは、その時代だから広東語にできたんですよね。唐君毅先生とかの頃は。
張：北京語でした。
石井：彼は広東語ができないから北京語でやったんですか。
張：いろんななまりがあって、ほとんど聞き取れなかったらしいです。
石井：そうでしょうね。
張：僕の時代は、何秀煌という台湾出身の論理学の先生がいまして、僕も頑張って取ったんですけれども、北京語での授業内容はほとんど理解できませんでした。
石井：本人も北京語で話しているつもりだけれども、北京の出身じゃないから、なまりが強いだろうし。
張：最近インターネットで牟宗三の番組を見ました。
石井：彼も山東の方言で、すごくなまりますね。
張：すごく難しいですね。
石井：いや、時々中華民国時代のビデオがインターネットで流れてきて、宋美齢のことばなども分かんないですよ。
張：分かんないですね。
石井：上海語みたいな北京語だから、半分、分かるか分かんないかぐらいですから、きっと新亜もそうだったんですよね。
張：あるいは中国出身の先生らにとって広東語は学問する言葉じゃないということでしょう。張燦輝先生は 1949 年に生まれた香港出身の香港人でしたが、こういう先生は広東語が母語ですから、広東語で哲学ができるようになりました。それ以前は北京語でした。労思光も北京語で講義していたんです。
石井：広東語で哲学をするというのは、ちょっとすごい面白い話なんです

けれども、それは漢字で書けば、同じ中国語になるわけですよね。発音だけが違うというふうに考えていいんですか。
張：そうですね。でも、よく言われているのが、広東語は結局古い中国語の音声とか声調とか、あるいは言葉が入っている。一番代表的なものは、「ハイ（係)」というやつですけれども。
石井：日本語の「はい」というのはたぶん広東語なんですよね。明治になって、香港からこの言葉を導入したそうです。
張：Yes ですね。その「ハイ」は北京語にはないんですね。「是」になります。あるいは、いろんな声調があって、あるいは、子音の P、T、K つまり、韓国語のパッチムみたいなものです。広東語にはそれらがあります。
　返還前になると北京語がはやり始めて、フェイ・ウォンのように北京語の歌が入ってきました。それは衝撃だったし、これからはたぶん北京語で唐詩とかを読むんだろうと思いました。でも、北京語じゃなくて広東語のほうが本来の詩の押韻に近いかもしれないです。
石井：古い音が残っていますからね。
張：ですから、広東語は、ただの方言ではなくて、面白いところもあるかもしれないです。
石井：ベトナム人に漢詩を読んでもらったことがあって、ベトナム語は今の北京語の発音よりも、その詩が作られた時代の音に近いというのは聞いたことがあります。
張：つまり、社会言語学で言えば、いわゆる周辺のほうが残っています。
石井：言語周圏論ですね。

●「緩いディシプリン」の道と希望の学問

張：日本でも、柳田國男あたりは沖縄に万葉の世界を見つけたと言っていました。日本研究学科に入った頃、哲学と日本研究の接点はどこにあるんだろうという葛藤がありまして、柳田で救われたという思いがあります。野家先生の物語の哲学も本来は柳田國男の解釈から来ている部分があります。仙台留学時代には柳田國男にはあまり興味がなかったんです。西田

をやっている人間ですから、柳田民俗学はまさに脇道なんで。けれども、日本研究学科に入って、柳田國男やそれを論じた柄谷行人の山人論にも関心を持つようになりました。

さらには巡礼ですけれども、和辻には、実はあんまり思想的な資源がないんですけれども、柳田は日本各地に行っていますので、柳田の民俗学もいい方法だと思います。

いま東大では、私は地域文化研究専攻に所属するようになりました。哲学でもなければ、日本でもない、地域文化研究という新しいディシプリンになってしまったんですけれども、僕はむしろそれは今までやっていた全てのものをうまく包む一番緩いディシプリンだろうと思っています。「緩いディシプリン」という言葉も坂部恵先生の言葉でして、緩いディシプリンだからこそむしろいろんな可能性を持っているかもしれないです。

東アジア藝文書院も新亜書院とは違っていいでしょう。新亜書院は、中国の哲学、歴史、文学を専門としていましたが、東アジア藝文書院はディアスポラ的な使命もないわけですから、もっと広い意味、緩いディシプリンとして、いろんなものをもっと受け入れるセンターのないセンターでいいと思います。「センターのないセンター」は小林康夫先生の言葉でした。UTCP の正式名称は「共生のための国際哲学研究センター」ですから名目上はセンターなのですが、これは中心ではないんです。

石井：そうですね。

張：UTCP を継承している東アジア藝文書院も中心じゃなくて、センターになるだろうという期待があります。

石井：中心のないセンター。

張：あるいは「緩いディシプリン」です。そのなかでいろんな分野のいろんな研究会、あるいは今まで考えもなかったものをこの EAA の中で初めて可能にする。石牟礼道子を読む会は一つの好例だと思います。

石井：やっぱり道なんですよね。道 1 本じゃなくて、あちこちにどこに行くか分かんないような道が一緒になっては、また別の方向に行くという、複雑な道がたくさん集まって——。それはどこにでも広がっていくようなイメージだと思うんです。今、地域研究のことを話されましたけれども、

駒場の地域文化研究というのは、地域ごとに日本とか中国とかフランスとかイギリスとかというふうに分かれて、それぞれが個別のディシプリンになろうとしているんだけれども、張さんは日本哲学ですから、日本をベースにしながら、実はとっても土着的なものを複数同時に研究の対象として抱えているわけです。それは柳田國男の民俗学だったり、福島や宮城の震災のことだったり、香港という張さんご自身のルーツであったり、さらには沖縄とか北海道のアイヌだったりという関心を、哲学的なパースペクティヴで張さんご自身が統合していく。これもまたもう一つ別の「地域文化研究」の形ですよね。それは私たち東アジア藝文書院が地域研究、とくに東アジア研究のジョイントプログラムとして始まったというのとうまい具合に重なってくるような感じがします。東アジアというのを一つの地理的な場所として、固定したものとしてとらえるんじゃなくて、もっとそれ自体をダイナミックな一つのプロセス、つまり道としてとらえたいということです。張さんがやってこられたことというのは、そういうものにすごく重なってくる。実際には、UTCP のころから数えて 10 年ぐらいいっしょにやってきているので、ずっと共にやってきているんだという感じがすごくしますね。

張：一言言わせてください。今まで UTCP よく言われたのが、それは哲学じゃない、やっていることは哲学的ではないという批判や指摘でした。しかし、高橋哲哉先生の言葉では、それは哲学ではないから、だからこそやるんだという。地域研究においても、ディシプリンとしての area studies ではなく、「area studies 2.0」をやるんだということを中島隆博先生も数年前に言っていました。

石井：そう。EAA を始める時は、そういうことを言っていました。

張：それは狭い地域研究ではないはずです。これが「緩いディシプリン」として、いろんな道を生かし合うからこそ、世界へのさまざまな道につながるだろうと思います。われわれはこの道を門によって閉じるんじゃなくて、むしろ道をまさに開くべきだと思います。そうすると、魯迅の話ですね。誰も歩んでいない道が、そのうち、道になるんだという。

石井：歩く人が多くなれば、それが道になるんだという。

張：これは『故郷』のなかのことばですが、最近また同じ魯迅の『薬』の中にも同じような道の話があることに気づきました。つまり、墓の両側に道ができた。その道はもちろん本来の道じゃなくて、みんな歩いているから、墓参りで来ているから道ができるんだ。本当に人が歩くことによって道を固めたという表現があって、魯迅の道は、恐らくイメージとしては、決して花の道ではない。花道はきれいな石畳の道なんで立派な道になります。それを専門的な道だとしましょう。そうすると東アジア藝文書院は、むしろ泥臭い泥道のほうがいいと思います。泥道だけれども、道なき道というものもできると思います。だから、決まっている道、ちょうど花の道ができてしまうと、これしか通らなくなってしまう。そういう決まりになってしまう。そうじゃなくて、いろいろ泥道ですから、もう僕も泥道だと思う。決していい道ではないですけれども、むしろ、いろんな新しい世界ですね。まさに未知の世界まで。

石井：未知の世界。道から未知の世界へ。

張：そちらへ展開してくれるはずだと思います。だから、魯迅は墓場とか死者のことを念頭に置いていますし、香港にも本当に悲しい道はあるんですけれども、それは必ずしも悲しみの道であるだけでもなければ別れの道でもなく、やはり希望の道でないといけないと思います。

石井：希望の話になるたびに魯迅の話になります。魯迅はペテーフィの詩を翻訳して「絶望の虚妄なること、希望と同じ」とも言っています。『薬』というのは秋瑾という革命家の死に対する魯迅なりの思いがあって書かれたもので、そこでは死んだ者に対する記念と死者に対する忘却への抵抗があるわけですね。

張：責任と使命ですね。先に言及した『希哲』という僕が始めた雑誌にも「希」という文字が入っています。最近中島先生が、その魯迅が訳した詩を「望みの詩」というふうにおっしゃっていました。哲学はフィロソフィア、つまり「智慧への愛」ですが、何年も「愛の哲学」という授業を担当していたので、雑誌の名前としては「愛知」、「愛哲」という言葉でもよかったんですけれども、東アジア人としては「愛」よりも「のぞみ（希）」のほうがいいだろうと思って、こうしたのです。

石井：そうかもしれないですね。
張：明治のころ、philosophy を「希哲学」と翻訳しようとしたことがありましたが、私は「希哲」だけでもよかっただろうと思うんです。
石井：希哲だけでも。
張：はい。そうは言っても学を否定するわけではありません。
石井：つまり一つの専門の学ではなく、人間として生きる態度のようなものが「希哲」という言葉の中にはきっとあり、それこそが学だというわけですね。
張：そうですね。石井さんは、やまとことば的なリズムだと「のぞみ」だろうとおっしゃったんですけれども、そうすると「のぞみを哲する」ということになります。
石井：「のぞみを哲する」。ただこれでは、「哲」が漢語のままですね。これはなかなか和語にできないんですよね。そこが日本語の難しいところですね。坂部先生はどうやって言うんでしょうね。
張：「悟る」とかでしょうか。今後「希哲」をやまとことばに当てはめて何と呼べるのか、いろいろ考えてみましょう。
石井：そうですね。

●未知の道に向かって：無根拠からの再出発

最後に張さんの学問——研究ではなく、敢えて学問と言います——が、これからどういう方向に行こうとしているのかをちょっと聞かせていただけますか。
張：私は 5 年前から日本哲学のグローバル化というプロジェクトをやってきました。これまで日本哲学というディシプリンは国際的にうまく機能してきませんでした。学会誌もなかったし、欧米では完全に無視されていましたので、頑張っていろいろ作ったんですけれども、坂部恵的に考えますと、それは間違った道だったかもしれません。つまりディシプリンにすることを目指してしまったのです。*Journal of Japanese Philosophy* という学会誌を作ることで、狭い門ができてしまった。

石井：そこは難しいですね。

張：Springer 社の協力を得て、*Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy* という叢書もつくりましたが（https://link.springer.com/series/13638）、これができたことによって、日本哲学の可能性がかえって狭くなってしまったかもしれません。この 5 年間、ケビンさんもそうだったと思うんですけれども、すごく一生懸命やろうと思っていましたが、本当によかったのか、最近考えています。もちろんこれも非常に重要ですけれども、これは果たして自分のやるべき道だったのかなという反省をしている最中です。

石井：また実存的な悩みに陥っていますね。

張：もう少し具体的な答えを今も探しています。一つ言えるのは、今までやってきたものは、道と関係しているんだということが最近やっと分かりました。巡礼もやはり道がないとできないし。

石井：泥道ですね。もう道があるかないか分からない道ですね。

張：そういう泥道的なものを。でもまだ泥道もできていないので。

石井：未知の道。

張：そうですね。目標があって、そこに向かう道は、今のところ全くないのです。野家先生的な考えだと、無根拠からの出発ですね。そういう名前のご著書もあります（『無根拠からの出発』、勁草書房、1993 年）。偶然にもこういう無根拠的なところに至ってしまったというか。

石井：住み慣れた香港をまた離れて、日本で、しかも東アジア藝文書院は文字通り道なき道を歩くところですから、どこにどう進んでいくか分からないんですね。

私も駒場に来て、何となく少しずつ分かってきたのが、この駒場って、実は道はなくても、何とか歩ける場所なんですよね。ここではどこの方向に続くか分からない道がつねに用意されていて、自分でそれらを切り開くことができる場所なんです。歩いていればきっと何か新しい道が開けてくる。そのような気にさせる場所です。きっと私たち駒場に暮らしている学生も教職員も、その全てにおいてここはとても希望がある場所なのです。そこに張さんが関わってくれることによって、新しい希望が開けるという

期待がまた膨らんできました。
張：もっと若い頃、道は一人で歩くんだと格好をつけていたかもしれないですけれども、最近では、やはり道は誰かと一緒に歩くものだと思うようになりました。本当に、友情 friendship が希望の道の同行者ですね。
石井：張さんは激しいところがあるから同行するのはけっこう大変そうですけれども（笑）。
張：いや、一緒に行きましょう。
石井：そうですね、ぜひ。
今日はこれまで張さんとおつきあいする中で感じていたことの背後にあるものがすごくよく分かったので、とても楽しかったです。もし皆さんからご質問があればどうぞ。
髙山花子（EAA 特任助教、肩書きは当時）：面白いと思ったのは、制度上、哲学もまた エクリチュール（écriture）のひとつとして、文学（littérature）のなかにあるということです。そのとき、その文学のなかに「学」が入ってしまっていることじたいはどのように考えられるでしょうか。
張：学にこだわる必要はないと思いますけれども、でも、文も結局は écriture であるという制限的な側面もありますし、歴史の場合は、どうしても書かれたものという傾向になってしまいます。そうじゃなくても、むしろ巡礼とかいろんな脇道でできた、偶然に発見した物語、つまり、history じゃなくて oral history、écriture じゃなくて parole 的なものを考えたいです。écriture ばかり読んで、écriture ばかり書くことは、それも重要だと思うんですけれども、希哲ではないだろうと思います。
今まで本当にいろんな道なき道を歩いたかもしれないですけれども、それは不安定です。また坂部恵先生の言葉ですけれども、理性の不安、常に不安、実存的な不安がありますが、無意識的に一つの安定した落ち着きを求めるのではなくて、不安という道をあえて選んでしまったという私があるかもしれません。
石井：今日はありがとうございました。

対談の後に

未知の道を行く

石井剛

この対談は、香港中文大学から駒場に着任なさった張政遠さんを歓迎するかたちの一つとして実施したものです。東アジア藝文書院(EAA)は2019年度から正式に発足しました。これは、北京大学とのジョイントプログラムとして、新しい東アジア学を共同で立ち上げることを目的にしていました。当時、これをわたしたちは「地域研究 2.0」と呼んでいました。その中核にあったのは「東アジアからの新しいリベラルアーツ」です。何らかの地域を対象とする研究が、その地域に関する知識を獲得して掘り下げること以上に、その地域と共に、わたしたち人間とその世界をより豊かに変容させていくような学問のありかたをわたしたちは希求し、その方法をリベラルアーツに探ろうとしていたのです。

このプログラムのいちばんの目玉は、両大学の学部学生が互いを訪れながら、共に机を並べて古典（クラシックス）の会読を中心とした交流を進めていく「東アジア教養学」なる学部副専攻プログラムです。教育プログラムを設置するためにはそれを担う専属の教員が必要です。わたしたちは英語と中国語を駆使しながら日本哲学の国際化に向けて奔走し、さらには東アジアにおけるリベラルアーツの先駆的存在である香港中文大学新亜書院の卒業生でもある張政遠さんに白羽の矢を立てたのでした。豊かな古典的教養は、今日のアクチュアルな世界の現実のなかで育まれなければなりません。仙台で長く暮らしていたこともあって 2011 年の東日本大震災による甚大な被災の現実に心を痛め、彼の地の復興のゆくえを現地に通って見守り続けていた張さんの学問的実践のスタイルもまた、わたしたちの理想に近いものだと確信していました。故郷の香港で大いに活躍していた張さんにとって駒場への転任、しかも、得体の知れないまったく新しいプ

ログラムの担当者として、ご家族を伴って赴任することはたいへん大きな決断だったはずです。

対談の中で言及されているように、わたしが張さんと初めていっしょに仕事をしたのは 2012 年のことでした。いつも落ち着いたようすでもの静かな張さんはどこかミステリアスな雰囲気を湛えていましたが、この対談を通じて、その外貌の奥にあるパッションが豊かに浮かび上がってきたのを感じます。

張政遠さんの学者としてのスタイルが「巡礼」ということばによって代表されることは、彼を知る人なら皆知っていることです。しかし、実は彼のこれまでの人生そのものが巡礼であったのだということにわたしはここに至って思い至るのです。その祖父の時代からずっと続く彼の巡礼の道は、いくつもの曲がり角を経て豊かに広がっています。これからもきっとそうしてその道は続いていくのでしょう。

道は言うまでもなく中国哲学の中核をなす多義的な概念です。それは進んでいく道でありながら、同時にその道を切りひらいていく方法や道具でもあります。道はあらかじめ与えられているのではなく、それが与えられるためには方法や道具の使用が不可欠です。道という語は動詞になれば、ことばを発するという意味にもなります。ことばが持っている予示性や述行性（パフォーマティヴィティ）の性質はこうした道の特質を的確にとらえています。ですから、道は希望であると同時に、いや、それ以上に悲しみと苦しみを伴ったものにならざるを得ません。道は刃を持つのです。わたしたちは、だからこそ先を急ごうとするのではなく、ゆっくりと、丁寧に、手足をきちんと使って道を紡ぎ出さねばなりません。仁の道と言ってよいかも知れません。

これを書いているいま、張政遠さんは福島県の飯舘村でフィールドワークをしているはずです。飯舘村は原発事故による放射能汚染を受ける前から、農牧業を中心に人と社会を育てる風土が根づいていたことで知られています。そこでは「までい」な生活が目指されていると言います。「までい」とは「まで＝真手」、つまり丁寧に、心を込めた暮らしのありかたを意味しているそうです。

対談の中でも触れたように、駒場には無限の方向に進み得る幾重もの道が約束されています。そこは常に未知の道が生まれているところです。EAA だけではなく、日本のアカデミア全体が大きな岐路を迎えているいま、これから先の道はいっそう錯綜していると言うべきなのかもしれません。それを解きほぐしながら、それぞれの道を、共に、そしてたしかに進んでいくためにこそ、「までい」に手をかけ、日常を慈しむことを大切にしたい——。この対談を読み直して、そうした思いをいっそう強くしています。

本来、このダイアログはもっと早く刊行されるべきでしたが、刊行すべきブックレットが数多くある中で、EAA スタッフが主役であるこの対談は優先順位を下げざるを得ませんでした。もう対談当時から 5 年になろうとしている今になってようやく刊行の運びとなったわけですが、この間の熟成を経て、対談の内容には新たな意味が加わっているのを驚きと共に感じています。このダイアログが掛け値なしに未知の道を開くものになることをわたしは心より願っています。

2025 年 8 月 5 日

対談者について

張 政遠（CHEUNG, Ching-yuen）
東京大学大学院総合文化研究科教授。研究分野は日本哲学。著書に《西田幾多郎——跨文化視野下的日本哲学』（台大出版中心、2017 年）、《物語與日本哲學——哲學的民俗學轉向》（五南出版、2022 年）、共編著に、『日本哲学の多様性』（世界思想社、2012 年）、《東亞視野下的日本哲学》（台大出版中心、2013 年）、《東亞視域中的自我與個人》（台大出版中心、2015 年）、*Globalizing Japanese Philosophy as an Academic Discipline*（V&R Unipress/NTU Press, 2017）など。

石井 剛（ISHII, Tsuyoshi）
東京大学大学院総合文化研究科教授・東アジア藝文書院院長。主な研究テーマは中国哲学。著書に『戴震と中国近代哲学—漢学から哲学へ』（知泉書館、2014 年）、『斉物的哲学』（華東師範大学出版社、2016 年）、共編著に『ことばを紡ぐための哲学—東大駒場・現代思想講義』（中島隆博との共編、白水社、2019 年）、 共著に『尋找黑暗之光：現代知識分子的挑戰』（黄英哲、Sebastian Veg との共著、政大出版社、2025 年）、『世界哲学史 6—近代Ⅰ　啓蒙と人間感情論』（伊藤邦武・山内志 朗・中島隆博・納富信留編集、ちくま新書、2020 年）など。

EAA eBooklet 16
EAA Dialogue 7
CHEUNG Ching-yuen X ISHII Tsuyoshi
[張政遠 X 石井剛　2020 年 12 月 22 日]

発　行　日　　2026 年 1 月 22 日
発　行　者　　東京大学東アジア藝文書院
編　集　者　　張政遠
編 集 協 力　　立石はな

© 2026 East Asian Academy for New Liberal Arts
the University of Tokyo

ISSN 2435-7863